

老年体験学習の学習効果と今後の課題

森 本 美 佐

はじめに

現在の学生の多くは核家族の中で育ち、老年者と生活を共にした経験が少ない。また学生にとって、老年期は自分の人生の延長線上にあるとはいえ、遙か半世紀先のことである。従って、老年者の特徴の理解がマスメディアからの知識の範疇であったり、講義の中で学習したからといって、老年者に対する考え方や行動が変化しなかったりする。私は、このような学生達が少しでも老年期にある対象を理解することができるように、講義だけでなく、様々な教育方法を取り入れている。その一つが「老年体験学習」である。

「体験」することの有用性については様々な文献で述べられているが、「人間の認識は体験を通して成長する」「患者を体験することによって患者の気持ちを理解し、患者側から見た援助のあり方を学ぶ」というような表現で表されているものが多い。本学でも、老いの体験により、学生自らが老いを知り、接し方やサポートのあり方など看護について考えることができることをねらいとしている。

老年体験学習の学習効果としては、老いのイメージ体験としての成果が発表されている。今回は、老いの理解だけでなく、学生の学習意欲の変化にも視点を置き、アンケート調査を行った。そしてその結果から、今後の体験学習についての課題が明確化され一考することができたのでここに報告する。

I. 現在の老年体験展開方法

本学の老年看護学は、1年次前期に老年看護学概論30時間、後期老年看護学方法論I30時間、2年次前期に老年看護学方法論II30時間の3つで構築されている。老年体験学習は、それぞれの科目で1回ずつ行っている。

まず、老年期にある人の理解と高齢社会の医療・福祉そして看護の役割について学ぶ老年看護学概論では、身体的特徴を学ぶ前に老年者疑似体験を行っている。『老人体験シミュレーターもみじ箱』を利用し、視野狭窄や視力低下・色覚変化などの視力障害、聴力低下、関節拘縮・筋力低下、手指感覚低下、前傾姿勢等を再現した。そして、ベッドへの臥床や階段昇降などを行う。講義の前に体験することによって、老化現象はなぜ起きるのかなど興味をもって学習に臨ませるのがねらいである。全員が体験できるが、物品と時間に限りがあるため、一人一人は2項目の体験にとどまり、グループ間で他の学生の学びを共有する形を取っている。体験後は学びや感想をレポートとして提出させている。

日常生活上の健康問題の特徴と援助を学ぶ老年看護学方法論Iでは、紙オムツ装着体験を取り入れている。紙オムツに200～250mlの微温湯を流し1時間着用する。7～8人グループで、2～3人

ずつ立位・座位・臥位の同一体位を1時間とり、経時的に訴えを記録する。そして1時間終了後、発赤などの皮膚表面に現れた変化を観る。これを各グループで研究レポートとしてまとめさせている。

健康障害を持った特殊な状況にある老年者について学ぶ老年看護学方法論Ⅱでは、手術を受ける老年患者に対する術前オリエンテーションを演習している。患者役の学生には『老人体験シミュレーターもみじ箱』を着用させ、看護師役の学生は、自分が作ってきた術前パンフレットを元に説明する。時間の都合上、数名しか患者役を体験できないが、その様子を見学させ振り返りを行うことにより学びを共有している。

授業では3回の体験であるが、実習室を開放し、いつでも学生が体験できるようにしている。

Ⅱ. 調査方法

調査対象は、本学衛生看護学科の1・2回生とし、平成14年7月それぞれの授業時間中に行った。1回生は老年看護学概論履修中で老年者疑似体験が終わって約1か月後、2回生は老年看護学方法論Ⅱの履修中で老年体験は3つとも終了していた。又2回生は平成14年1月に基礎看護学実習履修済みであった。

アンケートの内容は、あらかじめ感想やレポートから得られた身体面・精神面・日常生活動作の困難さの理解について、その程度を5段階リッカート法により尺度化し一つを選出させた。又、老年者に対する興味・関心、老年看護学への学習意欲も同様に調査し、老年者との接触（同居経験）や学年による差を分析した。2回生には、老年者疑似体験やオムツ装着体験が、基礎看護学実習に役立ったかも尋ねた。

Ⅲ. 結果

1. 調査対象の内訳（表1）

本学衛生看護学科1回生84名、2回生80名計164名で回収率は100%であった。同居をしている学生は、1回生22名、2回生36名で全体の1/3であった。反対に同居経験がない者は164名中72名であった。

表1. 学生の内訳（n=164）

		1回生	2回生
同居 経験	同居中	22	36
	一時同居	17	15
	経験なし	43	29
	無回答	2	0
計		84	80

2. 老化による身体面・精神面の理解

老化による身体面の困難さの理解は図1の通りである。学年による差はなく、「小さな字が見にくい」など視力障害については殆どの者が「大変そう思う」「ややそう思う」と答えていた。又、2回生には思わないと答えた者はいなかった。聴力障害については、「小さな声が聞こえにくい」と答えた者は164名中150名いたが、「高い声が聞こえにくい」「大きな声はうるさく感じる」は大変・ややそう思うを合わせても半数程度にとどまった。平均値も、視力障害と「小さな声が聞こえにくい」は4点以上であったが、「高い声が聞こえにくい」3.6「大きな声はうるさく感じる」は2.9であった。

日常生活動作の困難さでは図2のように、「座りにくい」について「大変そう思う」「ややそう思う」

と答えた者は半数程度で平均値も3.3であったが、他の項目に関しては、平均値も4以上と高く学年による差はなかった。

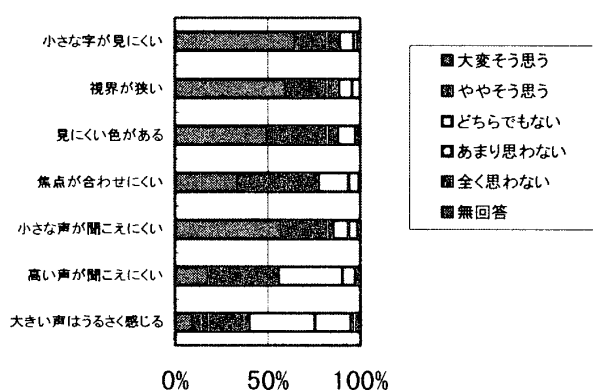


図1. 身体面の困難さの理解 (n=164)

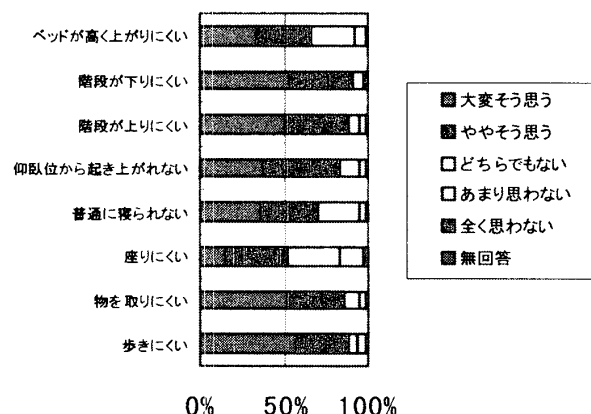


図2. 日常生活動作の困難さの理解 (n=164)

図3は、精神面での訴えを表したものである。「身体が重く何となくだるい」というものが140名を超えており、次いで「歳をとるのが怖い」137名であった。その他として「一人であることが不安」「誰かのそばにいたい」という意見があった。

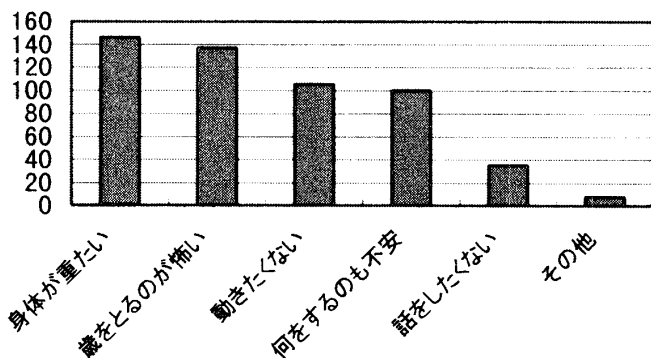


図3. 精神面での訴え (n=164)

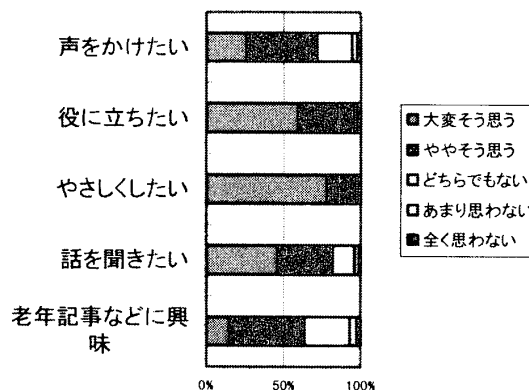
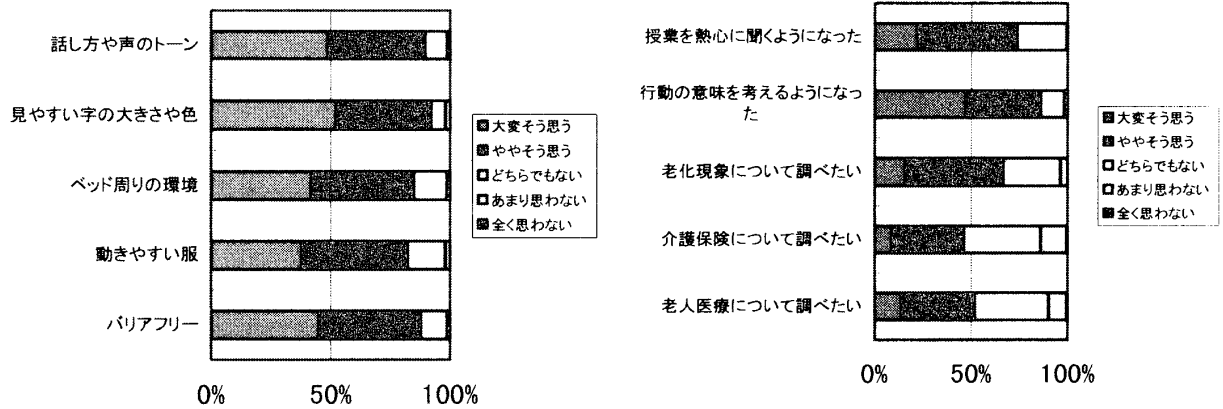


図4. 高齢者に対する興味・関心 (n=164)

3. 高齢者に対する興味・関心と学習意欲

次に、高齢者に対する興味・関心と学習意欲について調査した。高齢者に関する興味・関心は図4に示すように殆どの者が「役に立ちたい」「やさしくしたい」と思っていたが、「声をかけたい」「老年の記事などに興味を持った」と答えた者は60~70%であった。

老年看護学への学習意欲については、図5のごとくである。ケアで考えるようになったことは、どの項目も90%以上の者が「たいへんそう思う」「ややそう思う」と答えている。しかし具体的な学習面ではバラツキが見られている。「行動の意味を考えるようになった」「授業を熱心に聞くようになった」は3/4以上の者が大変又はややそう思うと答えているが、「介護保険や老人医療について調べたい」という項目は半数程度に留まっている。



a. ケアで考えるようになったこと

b. 具体的な学習例

図5. 学習意欲 (n=164)

学習意欲の10項目を学生ごとに平均値を出してみると、図6のように1回生では3未満のものが84名中4名いたが、2回生では全く見られず70%の者が4以上であった。同居経験の有無による差は見られなかった。

次に、老年看護学の時間外で老年体験をしてみたかを尋ねると、図7のように全くしていないものが1・2回生とも70%以上占めていた。

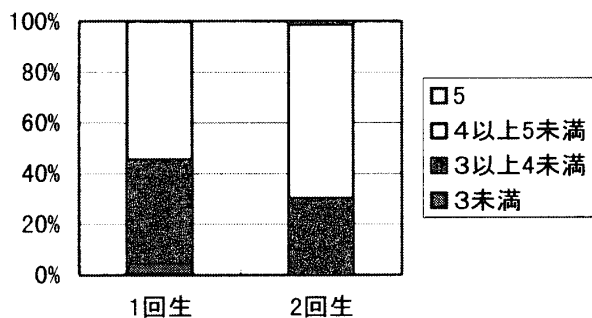


図6. 学習意欲の平均値の比較 (n=164)

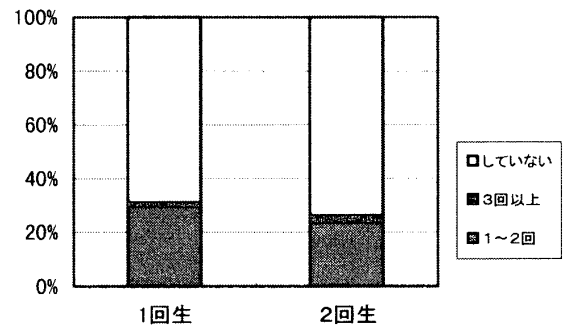


図7. 時間外体験の有無 (n=164)

4. 基礎看護学実習への効果

次に2回生80名に対し、老年体験学習が基礎看護学実習に役立ったかを尋ねた。図8のように、80名中61名(76%)が役立ったと答えていたが、役立たなかったと答えた者も1名いた。役立った理由は図9のごとく「患者の気持ちがあった」が61名中43名と最も多かった。反対にどちらともいえない・役立たなかった理由を見ると、「体験から時間がたっているので忘れた」「緊張のため忘れた」など何等かの理由で忘れてしまった者が12名いた。

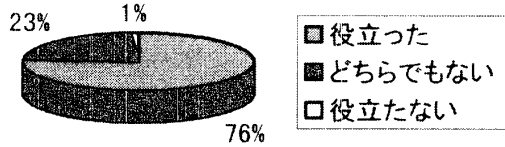


図8. 基礎看護学実習への効果 (n=80)

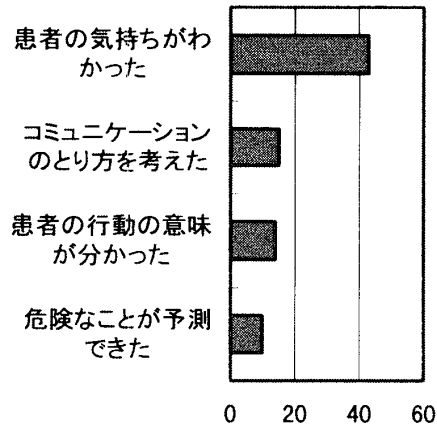


図9. 役に立った理由 (n=61)

IV. 考察

老年体験によって、身体面や日常生活動作の困難さの理解は1・2回生とも殆どの者が理解できていた。特に視覚関連項目や階段昇降など筋力低下項目、物を取りにくいという手指感覚項目は平均値も4点以上で、谷田¹⁾の研究と同様の結果である。反対に、「小さな声が聞こえにくい」以外の聴覚関連の項目は理解度が低い。これは上記の研究とは異なる結果となっている。現在行なっている体験では、テレビを見る、買い物の為に他者と会話をするなどの実際の日常生活動作を体験に取り入れていないために、困難さを実感できなかったのではないだろうか。2回生では、自分たちが作成したパンフレットを用いて術前オリエンテーションを行っていたために字の大きさや色により見にくさを感じ、視覚関連項目では「思わない」と答えた者が一人もいなかった。このことから食事や更衣、買い物など実際の日常生活動作体験を取り入れる必要があると考える。

堀口²⁾は、老年疑似体験では「身体面より精神面の理解が効果的」と述べているが、今回の調査でも全員が何らかの精神的な苦痛を訴えていた。「動きたくない」「何をするのも不安」と言うように、老年者が精神的に閉じこもっていくことの理解ができたと考えられる。これらのことから、老年体験によって老年者が生活していく上での不自由さ、不安、孤独感、そして閉じこもりから寝たきりに移行する危険性などを、学生自身が五感を通して体得できたといえるであろう。

また老年体験を行なうことによって、老年者への関心が増していた。これは、実際に体験することにより共感的理解が出来、老年者の役に立ちたい、やさしくしたいという思いが増したのだと考えられる。その思いが、話しかけ方やベッド周りの環境などケア面で工夫をしていきたいという意欲につながっていることも分かる。2回生では「患者の気持ちが分かった」等の理由で、80名中61名が基礎看護学実習で役に立ったと述べている。堀口³⁾は「体験学習は、気付きの体験から確信体験をもたらすことで態度や行動の変容をもたらす力を持っている」と述べているように、老年体験は行動変容への手がかりとしてはある程度有効であったといえるであろう。

しかしながら老年者への関心が増したからといって、老年に関する記事等に興味を持ったり、介護保険や老人医療について調べたいと思う者は少ない。1・2回生を比較しても、授業の中で3回老年体験をしている2回生と、1回しか体験していない1回生に大きな差はなかった。2回生では、基礎看護学

実習に役立たなかった理由として、「何らかの理由で忘れてしまった」と答えていた者もいた。これは、学習が「積み重ね」ではなく「その場その場」で終わってしまっている危険性がある。また授業時間外での体験回数も1・2回生ほぼ同じで、自ら体験したものは少ない。成田ら⁴⁾は体験学習の問題点をカリキュラムへの拘束感、つまり学生の受動的な参加を上げており、「体験学習の学習効果は持続しているとはいえない」と述べている。学生は、老年体験をさせられているのであろうか。そのために、時間外でも体験しよう、あるいは自ら老年に関することを学ぼうという意欲を持っていないのではないだろうか。体験学習の学習効果を上げていくためには、画一的な「体験学習」だけでなく、どのような学生に対してどの方法を用いて学習させるかを詳細に検討していく必要があるのかもしれない。しかし現段階では体験学習が授業として行なわれている以上、学生個々の体験をどのように抽象化し一般化された学習としてつなげていくかが重要である。幸いにも「老年に関する授業を熱心に聞くようになった」では、そう思うと答えた者が3/4いる。関心は持っているのである。教員の資質が問われているのはいうまでもない。

V. アンケート調査のまとめと課題

今回、老年体験学習が、老いの理解と学習意欲の変化に影響があるのかを知る目的でアンケート調査を行った結果、以下の課題が明らかとなった。

- ① 学生は五感を通して老いを体得し、老化による身体面・日常生活動作の困難さ、精神的な苦痛を殆どの者が理解できていた。しかし、現在の疑似体験では、聴覚低下の学びは低かった。
- ② 老年体験学習により、殆どの者が高齢者に対する興味を増し、ケア面での工夫を考えられていたが、老人医療や介護保険などについて調べたいという学習意欲につながったものは半数程度であった。
- ③ 3回体験している2回生と、1回しか体験していない1回生の学びや学習意欲の差は殆どなく、その場限りの体験学習となってしまっている危険性がある。また授業時間外で、自ら老年体験した学生は少なかった。

VI. 今後の老年体験学習のあり方について

1. 老年看護学概論

老年看護を実施していく上で、高齢者の立場を理解することは大切である。今まで老年看護学概論では、機能低下を中心とした高齢者疑似体験を行ってきたが、今後は自立して生活している高齢者の理解という視点を持ち、新聞を読む、買い物をするなどライフイベント体験を実施していく必要性を痛感した。そうすることで、今回学びの少なかった聴覚低下なども理解が深まり、さらには社会面を与える影響も理解できると考えられる。

この時期の高齢者疑似体験は、学習の導入部において学生の興味や関心を高めるという点で意味がある。現在は、終了後に感想や学んだことのレポートを書かせているが、個人個人のその場その場の気付きだけに終わってしまっている危険性がある。グループワークや、学生に自分たちの気付きや学びを発表させる機会を作るなどし、学生の考える力の育成や、学生間の学びの共有をはかっていく必要

がある。

2. 老年看護学方法論Ⅰ

オムツ装着体験は、羞恥心や苦痛が分かり老年者の気持ちに近づけることができる。実際、2回生の基礎看護学実習に役立った理由の中で、「オムツ体験により、患者の気持ちが分かりオムツはずしへの援助の必要性を考えることができた。」とあげていた者が十数名いた。しかしこのオムツ体験は、青年期にある学生への心理的侵襲の度合いが高い。又、終了後の学生のグループ研究論文を観ても学びに差があることも事実である。1時間しっかりと患者の気持ちになる者もいれば、装着当初は気持ち悪さなどを感じていても、途中から眠ってしまう者やメールをする者もいる。成田の述べるように受動的参加では学習効果も持続しない。この教科での体験は、日常生活上の健康問題への援助としてとらえ、全員が紙オムツ装着体験をするのではなく、寝たきり体験や、関節拘縮・筋力低下・前傾姿勢などの身体的変化からセルフケアへの援助の必要性を感じ生活用具の改良を行うというような体験学習を取り入れてもよいのではないだろうか。つまり、この教科での体験学習の目的を達成するための選択肢を学生に提示した上で、学生達の自由意志による体験学習への参加を促し、それらの発表の場を設けて共有の学びとするのである。そうすることにより、体験学習がおもしろいと感じ、主体的な学習へとつながっていくのではないか。また基礎看護学実習へとつなげていくこともできると考える。時間的な制限はあるが今後考えていきたい。

3. 老年看護学方法論Ⅱ

この教科での体験に関しては、今までと同様に老年患者に対する術前オリエンテーションという形で勤めていきたい。ただパンフレットによるオリエンテーションであるため、学生の気付きが視覚・聴力低下への援助の必要性に限られてしまいがちである。オリエンテーション時の体位や姿勢など老年者の筋力低下・体力低下も気付かせ、1年次からの積み重ねの学習ができるよう導きたい。そのためには、実施体験できる学生に限りがあるため、授業中での振り返りを十分に行う必要がある。

おわりに

今回の調査により、効果的な体験学習とは何かを考えさせられた。その場限りの『させられ体験』ではなく、気付きから学習意欲を向上させ、さらには学習効果を持続させていくために、私達教員は「体験学習」の教材研究を常に行っていかなければならない。

文献

- 1) 谷田恵美子：高齢者疑似体験の学習効果－大学生の老人イメージ・老化による困難さの理解－，吉備国際大学保健科学部紀要，第4号，101－111，1999.
- 2) 堀口由美子：Imagination Aging－老人理解のための疑似体験－，看護教育，38（6），453－457，1997.
- 3) 2)と同掲書
- 4) 成田 伸，他：授業研究「体験学習」の文献的考察，看護教育，34（2），91－100，1993.
- 5) 吉田喜久代，他：特集「主体的に学ぶ」授業、看護教育，42（4）263－278，2001.
- 6) 宮地 緑，他：老人看護学演習における老いの体験学習，看護教育，34（11），865－870，1993.